

学外者にも開かれた図書館をめざして

著者	関谷 伸一
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	9
ページ	55-57
発行年	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/575

学外者にも開かれた図書館をめざして

図書館長 関谷伸一

平成6年4月、100名の第1期生を迎えて、めでたく新潟県立看護短期大学が開学しました。しかし図書館は図書の整理が間に合わず、また新採用職員の研修のため図書館職員が不在となるなど、開学と同時に開館とはいかず、5月にまでずれ込んでようやく図書貸し出しができるようになりました。もっとも学生も教員も、新学期が始まったばかりで、落ち着いて図書館を利用できるような状態ではありませんでした。また図書委員会の仕事は初めての経験という教員、図書館事務は初めてという事務職員など、皆右往左往しながら手探りで図書館づくりを開始しました。

蔵書数の増加

図書資料については、初年度蔵書数約16,000冊でしたが、平成14年度ではその約2倍の32,750冊にまで増えました(図1)。短大開設にあたり、県立中央病院附属看護専門学校が閉校となり、引き続き県立公衆衛生看護学校も閉校となり、両校から多数の蔵書が移管されてきたことも、蔵書数増加に拍車をかけました。しかし短期大学完成年度を迎えてからは、図書購入費の削減、加えて欧文学術雑誌の価格高騰により新規購入図書は激減しました。幸い看護大学開設に向けて平成13年度から図書整備予算が認められ、大学完成までの4年計画で質量ともに充実させる計画となっています。

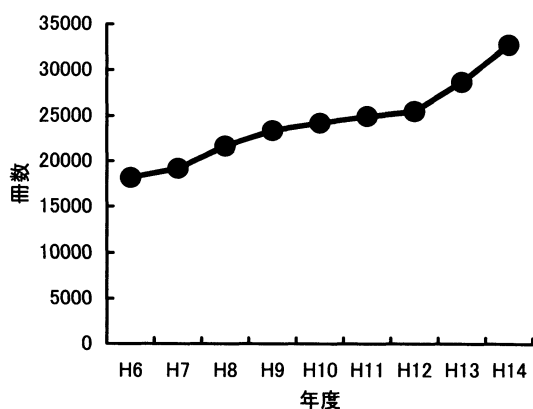


図1 本学図書館の蔵書数の推移

開館時間の延長

開学当初の開館時間は月曜日から金曜日までの平日のみ午前9時から午後5時まででした。利用者に対応できる職員は専任司書1名、臨時職員1名のみでしたので、開館時間に関しては、これ以上のサービスは無理でした。しかし学生および教職員からの開館時間延長を望む声が増しに高まり、初代の杉田図書館長はじめ関係者の尽力により、平成7年5月から臨時職員1名増が認められ、待ち望んだ開館時間延長が始まりました。平日のみ午後7時まで、ただし図書の閲覧のみ可能で、貸し出しや文献検索などのサービスは利用できませんでした。それでも2時間も余計に図書館が使えるようになったわけですから、大喜びでした。この年に「図書館だより」を創刊したのですが、もちろん創刊号は「開館時間の延長」についての記事でした。9月からは延長時間帯にも貸し出しができるようになり、利用者数と図書貸し出し数、共に急増しました。平成8年からはさらに嘱託職員1名が増員され、平日は午後7時半まで、土曜日午前9時半から午後4時半まで開館するようになり、サービス向上が図られました。平成14年4月に新潟県立看護大学が開学し、本学図書館は短大と大学の二本立てで機能することになりました。大学開学に伴い図書館は夜8時30分までと、大幅に開館時間が延長されました。平成14年9月から平成15年3月までは、試験的に早朝8時からの開館を実施してみました。朝9時の開館では、1時限目の授業開始が8時50分であるため、図書の返却もままならないとか、授業や実習開始前にちょっと調べたい、といった要望を受けての措置でした。このように徐々にではありますが、図書館の開館時間が長くなり、学生にとっては授業時間外の利用が楽になり、さらに学外者にとっては就業時間が終わってから本学図書館に出かけてくることも可能となったわけです。

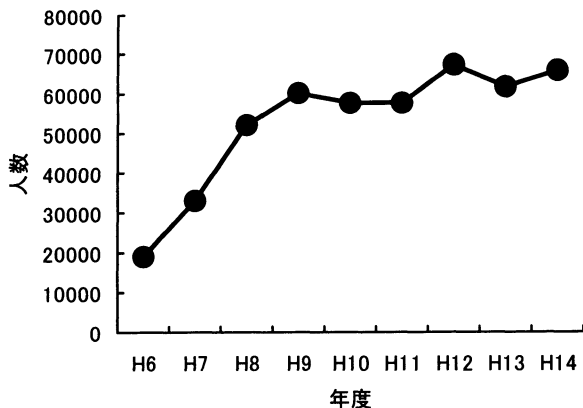


図2 総入館者数の推移

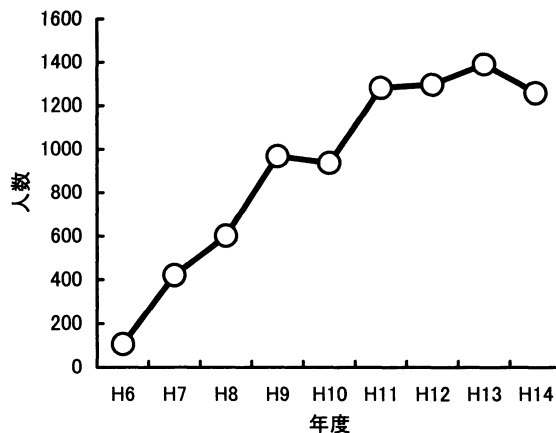


図3 学外者の利用

利用者数の増加

図書館利用者は、平成9年度の専攻科の開設を迎えた短大の完成年度までは、ほぼ直線的に増加しましたが、その後は横ばい状態です(図2)。貸し出し冊数についても同じ傾向です。学生定員が360名となり、利用限界が表れてきたといえます。平成14年度から大学併設となりましたが、学生数の増減はほとんどないため、図書館利用に関してもさほど変化はありません。

それに対し、学外者の利用は最近まで年々増加してきました(図3)。本学図書館の使命の一つとして、地域の看護・福祉関係者への情報提供が掲げられており、平成7年度から試験的に学外者に対し貸し出しサービスを開始しました。平成10年度には学外者に対する図書館利用内規を制定して、図書館利用カードを発行するなどして地域開放を推進してきました。特別の宣伝をしてきたわけではありませんが、利用者の口込みで年々利用者が増えてきました。

開館時間の延長とともに、平成14年度からはインターネットを利用して蔵書検索ができるOPAC検索システムを導入したため、遠隔地の自宅で図書検索をしてから本学図書館に出かけて貸し出しを受けることもでき、また学外者でも館内のコンピュータを使って文献検索ができるようになり、今まで以上に便利になったと思われます。たとえ図書館の中であっても、保健・医療・福祉の現場で現在活躍しておられる人たちとの出会いは、本学の学生にとっても大きな刺激となっています。そのような意味からも、本学卒業生をはじめ、地域の保健・医療・福祉関係者がますます本学図書館を利用されることを望みます。

学内LANとインターネット

さて、最近の図書館はコンピュータの導入、インターネットを利用した情報検索、マルチメディアの利用、などといった最新の電子機器の導入、ソフトの導入は当たり前になっています。本学図書館でも、平成7年度から、学内LANの整備、インターネットを用いた文献検索などに関する予算要求を開始し、粘り強く図書館機能の変革を要望してきました。当時は国立大学などでは学内LANがほぼ整備完了し、盛んにインターネット、Eメールが使われ始めていましたが、まだ新潟県では「研究室でインターネットを利用するのは贅沢である、そんなにやりたければ自宅でやったらどうだ」といった雰囲気、なかなか要求が通りませんでした。平成9年度ようやく予算がつき、学内LANを整備し、SINETに加入、インターネットによる情報収集が研究室から可能になりました。文献複写の図書館への依頼も、今までは図書館に出向き、カウンターで書類に記入して申し込みをしていたわけですが、この時から研究室の端末からEメールで申し込みができるようになりました。平成11年度にはCDチェンジャーとサーバーを導入し、医学中央雑誌CD版を学内LANによって利用できるようにしました。またこの年から学術情報センターの「目録所在情報サービス」へ参加し、図書館が行う文献複写サービスの業務そのものもオンライン化しました。これらを利用した他館への文献複写依頼件数は一次減少したものの、大学開学と同時に飛躍的に増加しています(図4)。

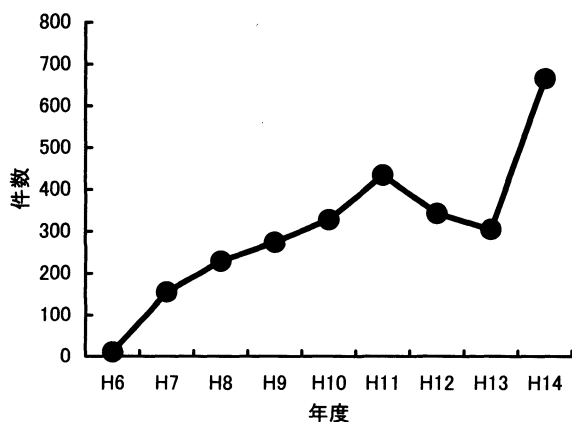


図4 文献複写依頼件数の推移

その他、平成9年度には図書館のホームページを立ち上げ、平成14年度には看護大学開学と同時に蔵書検索 OPAC および医学中央雑誌をインターネット仕様にし、さらに外国文献データベースである CINAL と PsycINFO を導入し、いずれもインターネットで利用できるようにしました。また、平成14年9月には上越教育大学附属図書館との相互協力に関する交流協定を看護大学図書館とともに締結し、同じ市内の大学図書館同士で利用の利便性向上を図りました。このように、インターネットの活用、図書館間の相互協力などにより、ますます学習と研究環境が整備されてきています。

今後の課題

今後の課題は、電子ジャーナルの導入、利用者用コンピュータの増設、マルチメディア利用室の確保、といったことではないかと思えます。最近では「図書館」という名称が、「情報館」、「情報センター」あるいは「メディアセンター」などに変わりつつあり、図書館の機能も様変わりしてきています。本学図書館も従来の図書館機能と情報科学室やLL教室が持っている機能を融合させた「○○センター」構想が必要となるのではないのでしょうか。いずれにしても新潟県立看護短期大学図書館は平成16年度末に閉館となります。新たな機能を持った本格的な看護大学図書館として、脱皮・飛躍してほしいと願っています。

最後に、開学以来図書館の運営と図書館サービスにご尽力いただいた専任司書、非常勤あるいは嘱託職員、事務職員の皆さん、図書委員会の先生方、そして平成13年9月に図書委員長在職中に志半ばに他界された故村山ヒサエ教授に感謝申し上げ、心からご冥福をお祈りいたします。

(新潟県立看護大学教授)